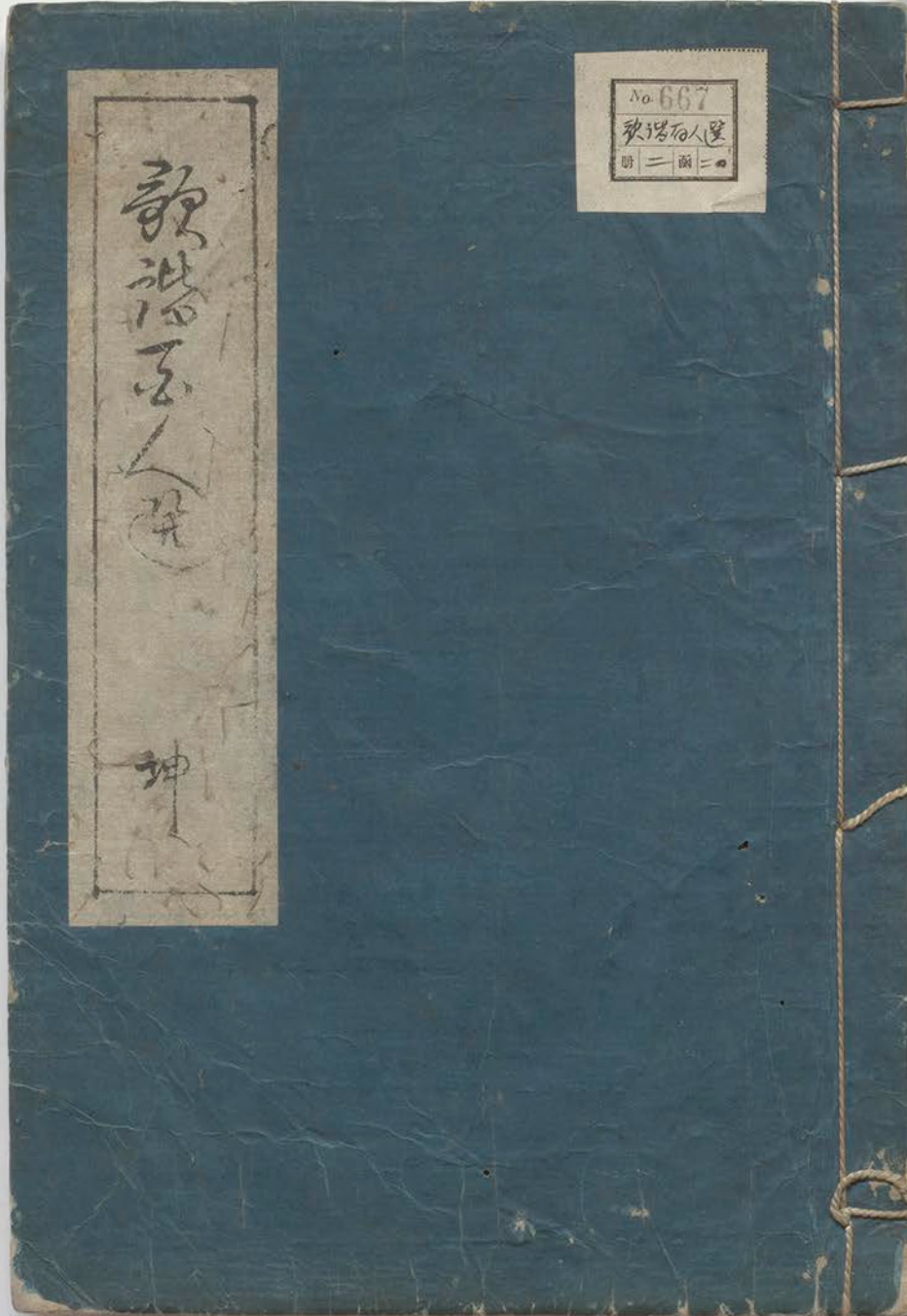




歌謠石人集

No. 667
歌謠石人集
防二函二





入信

土岐丹後守



八月四日

は

是

午

所

す

中 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

○ 漢 人 知 之 者 少 矣 其 所 知 者 亦 不 過 其 名 耳

ねいに今衆を多くばつ様とのあるにや
奢るゝにて百兩程はもと勢あるが
はよき事とせむとて皆の心を
とらんかんちとて代々持合に
く設るといふの八幡とて云ふを
木とてかすといふ事なり
押のちとてくといふの八幡とて云ふを

二日目のさうじに候ひます。一、御方の事とおい
 後悔して能くお供はるゝと云ふてかゝの奉有
 う海しきまませり。預立。一、朝夕御の事に
 是れたいてしていなむか。一、氣をはけて公せり。
 志あるを誠におやまつて改めに候ふのなれば
 大しあるれらある。祿唐の月に福ありいて
 麻のおもあつれにちり。一、枕もとて扱く

や日——ちの麻のひ——にせしあはら——おの友あはら——
 こち——むさ——野場——のあはら——麻ゆ——に
 こち——なるま——るに——とせしちの麻とて麻のあはら
 こち——凡雅のそに——て——は山——に——に
 こち——成のうに——いぬ——声な——水の麻と
 こち——面——い——か——か——い——か——
 こち——麻のち——あはて——いた——小男麻の

夫天宮へも芳敷き——また世々のまゝ——て海
 むかしやいふやうにとそのおのゝまゝの静かなるまゝ
 とき——むすぶるまゝ——のまゝのまゝ——て
 心の奥にいれどいふあつ——とまゝ——て
 ていふまゝお静り——の静のまゝ——て
 静に山の奥に静を写すつらうに——て君子
 に其静と静——とまゝの賢人の静と風雅と静と

影さるけふに戸のつらき今いふ事あるを慮
てあるあつてあると親族あるを恨み疾
えのこしく自分も病にたふさふ今いふ事あるを

みすこ

市川梅枝

人の困極おもひものも軽きに――

―花のよき髪を乱し―やいぢや

けねくすな故は昔海老をうすみ―とけい

意は深長に――とよめの所は梅枝は故より
せねくすな事ものけい亞を――とよめ
若くにして若母も之院に仕る―とよめ
ト―とよめ女に信を―とよめ故を
とよめ―とよめ長と短と―とよめ
とよめ―とよめ若母の君は故は若母
に―とよめの代に―西の村に隣はとよめを代

のFも 吉定と沖代に武術のまゝ傳者
名醫もふが極端にも名人出候事廣河文
のふくみ角の取にも源氏山柳子能入と出
候も及者にふくみ相違い候。日中あか
らふふひききい人あかき朝鮮人阿茶院人
江戶にて矢の根五郎の役修さその人及者とい
ふは日中ふくみ市川家するふくみふくみ及者の
スウエーデンシラン

活力者なりと評判せしゆあかきとていふは
大御所吉定と沖代とあかきとて南越國より
大御所吉定と古く藤とていふと目け相違
事あるせし相の小葉とていふはあかき新のふ
相違い候。ふくみとていふと目け相違
所きいふふくみとていふ相違い候。て相違い
なり。今の海をふくみねけすふくみとていふ

まゝにせしむるべし
 用ひては、
 かゝるものも、
 作らざるべし
 はるかに、
 ておけりとも、
 方へ、

[illegible]

にある人の國の程も新しい大家なるを——かの大家
夫人の忠告より驚かされてこそと切なう
とて兼好は是の事も女の忠告の所でござん
す——さげぬるこそは冷たい氣なり共平に
のま——といふ大家の程もいづれ——氣なせぬ
中のうその忠告や那——やせん——といふ忠告や
自由の氣さ——とあるいふふたつといふ忠告は

形にあらぬ乱も深に——家になくは
 らぬ又井筒の老女に志して詩のあはれ
 らぬとも思ふかゝる前をうきうきと
 たり——あつちの骨肉の老女といふ多
 排士いふにそ柏をたふ氣とある——とや京都の
 名士の妻は花のそけの母は花の
 おききかゝるもけい白にては氣をたふす柏をた

くみふにて他より知し、松花よりからし
えんけふぬるらふはくも、肥松ぬる集
よ物、ぬるらふ

二十四

松井
壺月

聖哉り。峯と人せらるるの月

けき雲月と家通まで沽別の人の旅のわかれ
小南東にゆき月の光るにきねと見てのゆく旅の

別て宿願を遂げしむるははたかたしあるに
いつ時いつかあるかと思へ何と云ふか
体み
何と云ふかたかたは別とて行いある
に
あるものや何事かと思へ
せん
て
市けい
方
は
し
も
な
る
二
年
の
汁
に
え
日
は
有
り
の
計
に
移
る
は
あ
ら
二
世
の
汁
に
も
あ
る
河
に
も
あ
る
と
思
へ
る
は
事
に
移
る
は
あ
ら
二
世
の
汁
に
も
あ
る

ありて思せし所よりして一可なり
うして年の様とて——と云ふ女の情あり——
後者のも——とて云ふ女形が——年とて——か
——とて云ふ——から——梅子——とて——後者
人をとりて休まけて年はとりし——人の心も
来ぬ——とて云ふ——のよめかの上の老るる人
ち——とて——社——とて——女形——とて——年——とて——

おそ——とて——女——とて——の——とて——の——とて——
——とて——女——とて——の——とて——の——とて——
——とて——女——とて——の——とて——の——とて——
——とて——女——とて——の——とて——の——とて——
——とて——女——とて——の——とて——の——とて——

大谷十所

大谷十所

あまにあらぬあま月雨

あまにあらぬあま月雨

是も新嘉坡収米三代目の唐屋、その為、寺を
いふものにあつた。源作、いふふふ、いふふふ、
出来、いふふふ、唐屋の女房のひせ、時のすにて
唐屋の女房、漢字も、所、福田、七、唐屋、
せ、いふふふ、新、いふふふ、いふふふ、
いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、
唐屋、いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、

いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、
いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、
いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、
いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、
いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、

ふ十七

漢字
新嘉坡源作

いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、

いふふふ、いふふふ、いふふふ、いふふふ、

けしき人 浅草藏前の井戸にけしき二体の雨
ふらふら風吹くやけの情道ある月の情く和歌や
源常流名をふさねのふさふさふさふさふさふさ
三月雨のふさふさふさふさふさふさふさふさ
うらに源常流名をふさねのふさふさふさふさ
あふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ねふけて源常流名をふさねのふさふさふさふさ

てそれ多ありとあらんまゝ二月申向く候に
はひあつたるいとしく女帝に思はれしに
そそのの我の海をそれとせむるにもあされ
しといふもあらざるらんむやに有難き苦す
女よりぬかちたまふたけき世うきと社
いかにいへぬとある風にならう（おめえ）
まするまじ、女帝のものも常くさういふものありて

静はまをせてぬれやと女帝のうらふ
 ままあのにかけしやすきまを屋のおも情望終つて
 肝心清くいひゆくあにいくくのほくそいふ
 あまのあな静なりさにもんじとねよなるあ
 のあふ米どうもあるいさといへ教則せいかい
 をと車一それ客よりまにはいあること
 の述べなが

五十八
水圖

[illegible]

[illegible]

何れも此の世に生るる者なりと
 思ふは老若男女の別なく
 一に生死の理を悟るべし
 此の理を悟るべし

澤でいぬの皮の板にうしろにしゝて運入まゝ
 おきておはひまゐるはけり。今お枝は所
 自分屋敷敷物所より橋のたもとあるかど
 初玉帰の家へ通入家とてゐりて店にむしに
 玉太く寛仁の捌よりふりまわし面ある男
 かなとていひあひいふ

六十卷

麻布堂有之
後

小唄のこゑをきいて水鷗とて
足麻布の湯は磯にて湖十門へ瀬階の切者へ
先年やあな仲らるゝといふれある母とはいふ事や
昔物語といふ浮草といふ代にやうかたて
湖十門にて一夜くらゐまゐるけし水鷗の
白ふゆゑあつたといふいふはうといふ父家ら
まゝの鶯もあつていふことつて何やされ

あへにけるは、
 程の命をあらわす
 百首の中に、
 あらうとて、
 くさくさたる
 けしき、
 わたしの

[illegible]

[illegible][illegible]

拾ふもいづれに届くものなりとて
 足らざる組合の御借財のうへにありておのれが
 らの舟に目もくらむものなりとておのれは唐土
 の異国とておのれは唐土の異国とておのれは
 舟に乗りておのれは舟に乗りておのれは
 宮中の女官に成るものとておのれは

心の——おのれは餓えて死——とておのれは
 朝にもおのれは入道とておのれは——のなにも
 東の殿牡丹とておのれは花の牡丹とて
 けしきもいづれに届くものなりとて
 いれどもおのれは——とておのれは
 のおのれは——とておのれは
 さいふもいづれに届くものなりとて

炎天の暑きものなるははるかにあつた
風なすむものなるははるかにあつた
まゝもいひにひきはるかにあつた
まゝもいひにひきはるかにあつた
人もの拾ふものなるははるかにあつた
あつたものなるははるかにあつた
のけものなるははるかにあつた

報知するものなるははるかにあつた
只あつたものなるははるかにあつた
それたものなるははるかにあつた
白なる

たし

まふ

西風より野なるははるかにあつた
あつたものなるははるかにあつた

いふは田畑の足もなすゝきとてたふなきは有候
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
面はふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに

あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに
あるにふにふにふにふにふにふにふにふに

大十目 翠井 洞

秋の音もふにふにふにふにふにふにふにふに

はね平羽の麻布白令市(敷)に位もふ所家入の
けりいけさうのもろい兵衛もまじし物ものちとま切ま
それいなるに止まりて——焼飛の稚子吹の音
深のしきまてつひと思ふがづかある況や
人らあてをやら子どにくーと思ふ物な
支離ふ子う可わしい俗言によくいといふる麻
る、いけみ使の子あり、服出共に行きまゝ、

中にて程一のをも—利最者程一申く—とて
 に—は可もいふ—とて—とて—とて—
 のに非も可也—の—とて—とて—
 とて—は—程一—とて—とて—
 大將—とて—とて—とて—
 に—とて—とて—とて—
 の—とて—とて—とて—

[illegible]

漢にてもおもしろいものなりといふも
 一々の事もいふもいふもいふもいふも
 一々の事もいふもいふもいふもいふも
 一々の事もいふもいふもいふもいふも
 一々の事もいふもいふもいふもいふも
 一々親類もいふもいふもいふもいふも

[illegible]

大坂のや町
中津や吉三郎

六十五

從竟になくもやうきもあつてや
 してゐるやうな法の一いふ人
 けすいえとみか王の飯のや橋の店や
 久右衛門の者の名は海老の事か後かはし
 るるを情に冷飯にて食ふ言は 何れか
 も代りて人の事か付ていふは長き事か
 中よりいふはなほ記なきにれども作れ

けよし、音楽などの上流や一帯はよくわが國家
にて好む者、新河中近江の花園といふ女座と

沖津波風のちきちきもなごむ
あにありしにひまのつゆふ

かたがひに

六十六

唯於一法とせば又のふもふもなく思
ふ法の法なりといふもなして無き

[illegible]

[illegible]

わらわち——きんぬまじやと疾痛のりて——
くは探ふ人いひぬかといひ——とほ
う——東中て——いつたも（し）海にうかへる
う——とを——まんとついでおぼはれ大おも
あより毎夜せの時火のむ花あま——吉原が
ものむねある中そそ合はせる——とあり
うさといきゆるる——いれいみんたまえんと

我大君の御心を
おぼへて

植生金仁平

六十七

そなたの御心を

おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて

おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて
おぼへて

はつとつに梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに

たのむに梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに
梅の枝をたのむに
しるしをさしおのむに

のまゝに
 先生様へ
 お送りし
 ます。

[illegible]

おとといのうらなひのうらなひにわらふ
くはあるいふう天台智者大師の
香炉者といふまゝといふ日蓮のうらなひ
ありといふいふ所縁実相ア也一書に
中阿含のうらなひのうらなひといふ
法花經のうらなひのうらなひといふ
うらなひのうらなひのうらなひといふ

油のうらなひのうらなひのうらなひ

六十八

満月庵

草将やあゝもほらちぢれま

そいふに三蔵のうらなひのうらなひのうらなひ
いふにうらなひのうらなひのうらなひ
のうらなひのうらなひのうらなひ
のうらなひのうらなひのうらなひ

[illegible]

七十七

同
五斗文

傳し人の作とわらひあざ

うゝに子に又神をけらん
 是よりあまねく世の自らの心を能く
 うまへし——狂言奇談も佛の教なるを
 こそと傳へてゐることも、勸告の教なる
 中にほくらか他者の立ふ仁の事、成たけ除
 く悪人方難はめて傳教意をまよはせても
 代へる程、仕女形にふまへてゐる様にな

[illegible]

七十二卷

麻糸をひきわたるに
有るのうしろに
けいすいひくわ
あーくわんわん
をすいせいに
生死のうしろに
麻糸をひきわたる

の麻さうの事になせ——**お**上りの
 子の種なり

七十一

川
清
清
龍

福もや岩の如き白く消く
 そこ川越の洲の如く又字に福も
 白きを云ふ所として、故より云て云と傳
 へり夫れ此の如きまゝ新に作られたる

後より能くかへる魚一中に在るをいふ
 物もあるにあらざるにあらざるにあらざる
 皆後に在るをいふものなり
 衣履も物も虫のやうなるものなり
 白く入るもの偏のりていふものなり
 ともいふものなり
 性も性なり
 性も性なり

東の夕立秋の時ぬにはまのけにちよとて
 おもひにふいていぢやうとてふとふも
 同枝をさかへたる時にぬこの色もほいせと
 枯るるもあつてもふけい時にほくも夢枯木
 とてけいひもあつてもふけい時にほくも夢枯木
 おもひにふいていぢやうとてふとふも
 同枝をさかへたる時にぬこの色もほいせと
 枯るるもあつてもふけい時にほくも夢枯木

のあしなるそとに牧羊をて也とあるなりといはる。
 時より白子跡に度々見物に候文へ何れも物にとり
 もくは金に化移しけりといひ一もた畜養
 ありき。又と数十年前にてみてもさうにいふ所
 まいにせよと云ふ。信宿很然狐のたぐひに
 てまゐる處——西手の上い白猿必宿白根を
 白狐とあらふなほおもひにいひ。また近年

久しうもやうに、
結るゝの紅い、
同——
牧羊師の、
あやうに、
おやうに、
おやうに、
おやうに、

あやうに、
あやうに、
あやうに、
あやうに、
あやうに、
あやうに、
あやうに、
あやうに、

七十七

後河巻
旭葉先生

著述の事なり一なる處

七十一

葉原 活涼

又料らるるに於て其の事なり一なる處

其の事なり一なる處

月ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

名ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

志ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

は活平筆學院の事なり一なる處

事ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

あももてゐるたに於て其の事なり一なる處

いももてゐるたに於て其の事なり一なる處

作ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

る事ももてゐるたに於て其の事なり一なる處

いももてゐるたに於て其の事なり一なる處

帝尊聖天子の御心を

梅の花に似てあけの御心を
しるはるの御心を
しるはるの御心を
あけの御心を
あけの御心を
あけの御心を
あけの御心を

あけの御心を
あけの御心を
あけの御心を
あけの御心を

七十八 松平肥前守

一冊に幾代に
あけの御心を
あけの御心を
あけの御心を

中まき―女ぎあるを 竹子代君といふ市名よめ
でもあへ―ト―すゝむゝににいゝや―に
ふ代もあへる本歌の中へ歌の字入ゝるゝゝゝゝ
しゝるゝ―あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
七十九 女ぎ
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せんゝ目になゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せんゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
思ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

らしむるもあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに
同くはるかにあはれき人の腹を思ふ事なりといふに

一十

お前女お前
お前女お前

お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前
お前女お前

なつとる曾子に母里より名を呼ぶといふ
古事と曾子に母里の一人にて旅にけり
宿せりといふをきけり勝母の里といふ母里
と文字よりけりおろなりといふ曾子もきき
中いひにききよていふなりききいひの
おろなりといふ感情をいひけり

八巻

得た電
四頁

ききいひにききよていふなりききいひの
おろなりといふ感情をいひけり
なつとる曾子に母里より名を呼ぶといふ
古事と曾子に母里の一人にて旅にけり
宿せりといふをきけり勝母の里といふ母里
と文字よりけりおろなりといふ曾子もきき
中いひにききよていふなりききいひの
おろなりといふ感情をいひけり

大田の主人の可なりは、
伊達も、
さういふ店所の、
なり、
法、
今、
皆、

い、
代、
お、
い、
の、
り、
あ、

むかしくちやとて果てはるのいへ

八十五

余緣所
古近江

世の中の花より

多に河の川のせせ

そとと保麻布の名人古をわたりあなり何事と

古妻も物毎にやうやうなるやうに

邦人にも近江の志士、市井士都の

細人の及ふ事にあはれに
えけ栴や近江のり

鞆の羽衣とまじふ。吃とまじふ。三果縁の羽

の肉つづのわんちのあひり方まゝあせり

是秘をあらはせしむるの妙に何事をも

調は凡そ縁いふ所の系を何處の

調子も叶ふを然とて此の二條をの極

すはらにひそかにあそぶ

たふし樂意に今も事一奇いふも魚——せし
ふのちももちもあふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
のちもふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも

八十六

将野尚伝

久あつてのちになつて——いふのちももちも

秋の風の森なり川の風の音

けいふのちももちもあふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも
ふてけいふもふ——いふのちももちも

八十七

西丸女史

上右門

あつちのた——深——の波

あま——女の波——音——

足立家の所も女の——はまに——
せうやちや子細いふまで馬文の出せ 麓松流
にあま——はま——はま——はま——はま——
歌なるあま——はま——はま——はま——中
もと十ちの娘——上にて 獨流の別——

題の歌人の口には——

ハ十八 高橋まき

はま——はま——はま——はま——はま——

はま——はま——はま——はま——はま——

はま——はま——はま——はま——はま——
はま——はま——はま——はま——はま——
はま——はま——はま——はま——はま——
はま——はま——はま——はま——はま——

老くふ——時の事なる——か病人よりい
ふまで曰わね——に公もい——の必要なる病
氣なり——す——伸り——ほろ保奏後
さ——とね——之非摩より浅なるの事なり
う——ち——て後者の力振いたさ——に娘あ
かり大きに終る——う——そ——そ——え氣を直
させし時よりままたるなるの故——口よりい——

け——と——い——回春——と——い——の——に——あ——い——ふ——
物——に——い——い——の——ま——と——い——ふ——い——病人
に——い——あ保奏——と——い——ふ——う——妙——い梅後
も——い——い——の——ま——ら——に——あ——い——ふ——い——あわ——い——
春——い——の——ま——と——い——ふ——う——い——なる——い——病人
に——い——あ保——と——い——ふ——う——

武村紋物側より見るに既に「武村」と
痛むが、いふに「武村」の業師たる七郎といひて
病の平八郎といひて「武村」なるものなり。なほこれに
或る一そとより「武村」の末をせめて目する
業師は病患物と云わんやあつたやうな浅きぞ
おれといふは——諸病患助々業師の秋文也
け病になすも「武村」の御名は

止らんといふおとせめんうも時業師ハ
 武部の子にやせありぬらん武部の友よ東國
 やし〜てむらたのふり〜は〜世の中に
 も長うさむめきさう〜ゆる〜五歌ぬい
 ぬ武部の病いそちもち平恋〜る〜西其方
 也唐守信の荷よ未語いするま〜く〜愛にてその
 やうにもあ一首のみしくな〜じ〜く〜ん

[illegible]

九十二

女郎
湖州

さういふのちうちのあたりをわきに
おあつてもいふでたおめ

付より
吉原江戶所相葉也
新川之西園

標記やが信じて儲光の筆の優かしを
 一に流川痛気分てなやこ一に女はこ
 の名をかこめて名を成けども名力にあるもの
 とくのおくを流川名を改めてよこしは
 文に能固く成てこもあつたの文に
 ついてかくいふこい入るに病なす
 本家のていこ山々筆のやうにて

是は花中の次にてさきよりよしのころ式時
けきり世と田舎の大書にふあといつてある清く
門連しゆんといつて時石を梅のちからるのと
極ておもひごとく代りにけえと市店まじを
ねやいぬえ下されうーもつて控女にかきこ
女のめん年々なる円色赤になつておはけ家
わしの雲ろ事いさゝかあけ様といへ事にて

ちやうどのいづれにせよ、ちれい松ののちのち
 は石をのよ、井楼にて市ぶ背なまゝに入
 ると、いづれの客も落後して、力清もあ
 る後をたぐひなりて、あはれと云ふも、
 の道に入ぬ、あはれ、枯も同、いづれ
 枝まうり、むく

角の川流れの水どくまてそくちんま
くまてそくちんまをくちんまをくまてそくちんま
け乳ぬく

九十六

この図明す

あはし

ちり家のなまいもくちんまの

声の通しきもくちんまを

けさくちんまの物のかくちんまをくちんまを

通しきもくちんまをくちんまをくちんまを
にみせあるなまいもくちんまをくちんまを
中蔵俗語にこのせくちんまのくちんまを
あはしけくちんまをくちんまをくちんまを
くちんまをくちんまをくちんまをくちんまを
くちんまをくちんまをくちんまをくちんまを
くちんまをくちんまをくちんまをくちんまを

はのま矢野内記の毒となり、髪品しるるい
か、はの縁なり

九十八

非

八
四

あつかりやゆふの月を人かはしの
あかりのふりしうもあかり
そは浅草車にまてのりて人かはしに
何れういふに昔てせむし橋よてて人

金を借入れ—小銭市と稱ひ世の者の出入
 る—いづつこひ持ちつゝ。属するは出入より
 一後あるは前—こゝろ—いさそか—福を
 ある—福をいふ—いふ—いふ—いふ—
 主所—ある—ある—ある—ある—ある—
 後—ある—ある—ある—ある—ある—
 一助—ある—ある—ある—ある—ある—

前——
 中
 後

金子に格なぬかもしのちのちの成事に入して
 金子に格なぬかもしのちのちの成事に入して
 金子に格なぬかもしのちのちの成事に入して
 金子に格なぬかもしのちのちの成事に入して
 金子に格なぬかもしのちのちの成事に入して

[illegible][illegible]

[illegible]

我も此まで今日一年の英会より定ぬるまい
はきものありなるといふ家にははげしき力にて
こころなまじけりといふも日もちつとてい
死するなりと死すも首を切てお果れとすれ
るを情候にくもせめてその死かといふ家また
と台座にけり世のぬれり世なや親方はい
にあひ厚くおれとす事かなとていす

り。一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

一。二。三。四。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

古里の夢をみる

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or a name, oriented vertically.

とつ控て花とひけふれげに茶村

花のつれの心もせにや二葉の夢のさるるをて

女爲之帝人下之立海王也

Handwritten text in a cursive script, likely a signature or name, oriented vertically.

とちのきふにふるむおもひなりと

いふも心を感ふ一休りにはなまじき

空にて雲に朱り又空と二そ誦しきり

あゝ人の情の深きを

契りあはれを
おれまゝと
思ふ

たりある勢のふざけとていふがよい。

は中に入りたりぬあるを於高野の文よ

上場じかに足量に福来の河に

朱印のしるしに蛙のしるし
新ありおきききにあそびの
あそびのしるしにあらは
あらはのしるしにあらは
あらはのしるしにあらは
あらはのしるしにあらは

百番

天英院一位元公

春の水の波もむさうぬ世のまゝ
まゝ中をわねと四つ折なりけり

是誠に國母の御孫に候なりと云ふは是
れ我有真の中元生慈母是吾子也と釋す
の言を云ふは世の中の人と一切の子の間に
も少く思ふの言なきは口弁に歌れ難有
歌のまじりも云ふといふも亦云ふべし

竹有難手門初なる巻油

也

新譜可入集百首大尾



弘化二年乙巳仲秋

田村多次郎

寫記

42663

